風雪青き思惟の山峰に

右遠俊郎

下

新日本出版社

右遠俊郎

風青き思惟の峠に

下

右遠　俊郎　（うどお　としお）

1926年　岡山市に生まれる
日本民主主義文学同盟員
主な著書　『さえてるやつら』『冬の大いなる虹』『赤いシクラメン』『小説　朝日　茂』『忘れ得ぬ人』（以上，新日本出版社）『無傷の論理』『病犬と月』『野にさけぶ秋』『不逞の春』『わが笛よ悲しみを吹け』『長い髪の少年たち』（以上，東邦出版社），『文学・真実・人間』（光和堂），『青春論ノート』（青木書店），『碁の心人の心』（大月書店）など

風青き思惟の峠に　下巻

1991年2月5日　初　版©
1991年4月5日　第2刷

著者　右　遠　俊　郎

発行者　山　本　　功

郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ヶ谷4－25－6

発行所　株式会社　新日本出版社

電　話　東京（3423）8402（営業）
（3423）9323（編集）
振替番号　東京　3－136 81

印刷　亨有堂印刷　　製本　小泉製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

ISBN4-406-01928-6　C0093

Printed in Japan

下巻　目次

リンゴの味に唇ふれて　5
松籟は吠ゆその挽歌　100
憂ひぞ深き人の子よ　205

上巻

序　章

楊柳岸に蔭淡く

ともしび消えて汐夜風

装幀・永井　潔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

風青き思惟の峠に

下巻

リンゴの味に唇(くち)ふれて

一

七月の下旬、旅順の空は晴れて、暑い日が続いた。その暑さのなかを遼吉たちは、勤労奉仕に向って出発した。一年生、二年生の全部が動員されたから、寮は空になった。

普通なら、七月から八月にかけて、五十日の夏休みがあるはずなのだが、それが昨年から、勤労奉仕に当てられるように変っていった。昨年は北満の鱀寧で、山砲や野砲の弾丸磨きをさせられたという話である。

そのとき生徒たちは、動員先が部隊だから、作業の苦しさには耐えるとして、腹一杯食べられることを楽しみに出かけたところ、その当てがみごとに外れた、ということであった。

遼吉たちの行先は、大連管内の凌水屯と聞かされていた。その地名に遼吉は覚えがあった。小学六年生の夏休みに、遼吉は友だちと誘い合わせて、凌水寺に「満洲アゲハ」を採りに行ったことがあっ

たのだ。
「満洲アゲハ」は雌雄がまったく紋様の違う珍しい蝶で、凌水寺の付近でないと見られないと聞かされ、少年の心に矢も楯もたまらず、その無謀を笑われながら出かけた。
そして幸運なことに、「満洲アゲハ」の雄も雌も採ることができた。それを持って帰って、展翅するときの指先の慎重と心躍り、さらには教師に提出するときの得意、それは忘れられない記憶としてあった。
そのとき遼吉は、星ケ浦行の電車に乗り、終点の黒石礁で降りて、あとはバスと徒歩で、一時間近くかかって、山の中の凌水寺に着いた。石段が見上げるように急で、遥かに続いていたのを覚えている。
だが、凌水屯は山中から海岸までを含む広い地域であった。遼吉たちがトラックで運ばれたのは、旅大道路沿いの海岸であり、有刺鉄線で囲まれたなかには、三角兵舎がいくつも並んでいた。
なかに入って遼吉たちは二年生と別れ、一つの兵舎に導かれた。それは、三角の屋根を持った長細い建物であり、中央を土の通路が走り、その両側に膝の高さに座がしつらえてあった。壁を頭にし、通路へ足を向けて寝るように、丁度人間の背の高さほどの幅になっていた。
座の上にはアンペラが敷かれ、支給された毛布二枚を掛けと敷きに使って寝る仕組になっていた。そうやって間隔を詰めて寝るから、一兵舎で一年生全員、ほぼ二百人近くが収容できた。
まず手始めの仕事は、自分たちの住居の整備、アンペラを太陽の下に乾すこと、兵舎のまわりの溝を深くすることであった。水はけが悪いと、兵舎の通路に水が溜り、舎内が湿るからだ。アンペラを乾すのは湿気とシラミやノミの追放が目的だった。

兵舎のなかでは組別に場所が定められ、遼吉たちの理乙は片側の端で、入口の近くだった。通路をはさんだ向いは文科で、山下の顔はそこにあった。高畑は少し離れたところに、何やら不服そうに坐っていたが、となりに寝るはずの大久保は炊事班に選ばれ、別の兵舎に行っていた。

生徒たちはみな作業ズボンにゲートルを巻き、頭には戦闘帽、上半身はシャツ、足には運動靴といういでたちだった。荷物といっても雑嚢が一つ、暑い盛りだから、みな身軽だった。

黒石礁から遠くない位置にあったので、休日には大連の市街へ出られる、と遼吉たちは期待したのだが、公休は月二回、しかも外出禁止を言い渡された。

二

翌朝は午前六時に起床、海岸に追い出されて点呼を受けた。朝の浜辺の空気は清々しかった。戦闘帽も点呼も、ここでは遼吉はあまり気にしなかった。部隊の作業現場のなかでは、学生であることにこだわる必要はなかったからだ。

朝食は高粱の入った飯に、冬瓜のすまし汁だけだった。飯の量も多くはなかった。まだ仕事に入っていないからだ、と思うことにした。が、五月の土城子での生活を思い出すと、同じ勤労奉仕でも、海軍と陸軍とでは、宿舎や食事に大きな違いがあるものだと思った。

午後になって、海岸に整列を命じられた。学生勤労奉仕隊の結成式、入隊式であった。ここは満洲第〇〇部隊の何番目かの作業現場であり、部隊長自ら出張ってきて訓辞を垂れ、「今や勤労動員は学徒出陣である」と叱咤した。

遼吉は海岸に直射日光を受けながら立ち、部隊長の話は聞かずに、整列した学生集団を見渡した。千人を超えると思われる学生群が整然と並んでいた。

旅順高校だけでなく、四つか五つの学校の生徒が集まっていた。遼吉は彼らの被っている帽子で、どこの学校の生徒か分った。蛇腹の丸帽は、南満工専と大連高商であり、白線帽は満洲医大予科であり、戦闘帽はどこかの師範学校であった。部隊長の言によれば、総数千五百人ということであった。

入隊式が終って、部隊長や関東局の役人が去ると、現場主任の少尉が具体的な作業の説明をした。彼の話は主計少尉らしく、実務的であった。

彼の話によると、関東軍は一年前から、鉄筋コンクリート船の研究を始めていたが、いよいよその製造に着手することになり、当地にそのための造船所を作ることになったが、その建設には造船技術者を必要とせず、土建業者だけで可能であり、諸君の勤労に期待するところ大である、というものであった。

遼吉は聞いていても、コンクリート船というのが、どうにも腑に落ちなかった。まさか軍艦を造るわけではなく、輸送船なのであろうが、鉄不足のための代用品なのであろうか。遼吉は船のことは何も知らないし、少なくとも関東軍の研究の成果という以上、それを信じて働くしかないのだが、やはり半信半疑であった。

造船所の建設は急がれているらしく、学生勤奉隊は一つのドックに取り組み、それを五等分して、その五分の一を、他校と競争する形で、旅順高校が受け持つことになった。

その翌日から、本格的な作業に入ったが、旅高生を半分に分け、第一班は午前五時から午後一時まで、第二班は午後一時から九時までと、二交代制で進むことになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

学生のほかにも、満人の勤奉隊がいて、すでに一ヵ月も前から作業に従事しているらしかった。彼らもどこからか連れてこられ、働かされているのだろうが、作業場への出入りに隊伍を整え、勤奉隊の歌を歌いながら、整然と行進していた。

彼らの待遇がどんなものか、遼吉に知る由もなかったが、彼らの垂れた糞が至るところに散在しており、それは赤い色をしていた。たぶん、ほとんど精白されることのない高粱飯を食べているのであろう。ひょっとしたら、彼らのための便所が整備されていなかったのかも知れない。

しかし、その赤い糞は、落し主の肉体が健康であることを示して、こんもりとしていた。

三

遼吉たち一年生はまず第一班に属した。まずというのは、公休日を境にして、第一班と第二班が交代することになっていたからだ。

起床は午前四時四十五分。舎前に整列し、ツルハシやシャベルなど用具を持って作業現場へ行く。洗面だけは先にすますが、食事はあとのことである。ただちに作業にかかる、と言っても要するに穴掘りである。

作業現場は海岸に近いと言っても、渚からはかなり離れている。だから、砂を掘るわけではなく、やはり土を掘ることになる。それでも、少し深く掘ると、水がにじみ出てくる。土はツルハシで起し、シャベルですくい上げ、モッコを使うこともあるが、多くはトロッコで運ぶ。

朝の海風は肌と肺に心地よいが、それでもすぐに汗は流れ出す。穴のなかで土を起すもの、穴の外

で運ぶものと、だれが指示するわけでもなく、自然に交代して働く。
およそ面白味のない単純作業に、ふと嫌気のさすこともあるが、仲間が働いているのを見ると、自分だけ楽をしては申し訳がないという気になる。何しろ、となりのブロックでは、他校の生徒が働いていて、それに負けたくないと思ってしまうからだ。特に、丸帽や白線帽を被っている連中には、意地でも負けられない。
夏の日の出は早い。涼しい風と思うまもなく、波がきらきら輝き出すと、海岸の空気は早変りするように温度を上げる。汗を流れるにまかせながら、実りのない連帯意識と競争心で、ふときざしてくる疑問を殺しながら作業を続ける。
七時になると、兵舎に帰って食事をする。五分搗きぐらいの高粱が三分で米が七分。むろん、アルマイト碗の一膳飯で、量も多くない。そして、連日の冬瓜汁。飽きたというのではなくて、この冬瓜という代物、最初の一口から味も素気もない。
そんなわけだから、朝食をすませるのに五分とかからない。腹いせに茶をがぶがぶと飲むものがいる。どうせ汗になることは承知の上で。舎内のところどころで紫の煙が上がる。ここに来て、一年生のなかにも煙草飲みがふえたようだ。何かを口にしていないと寂しいのである。
四十五分後には作業現場へ戻って、同じことの繰り返し。太陽が高くなるにつれて、気温の上昇だけでなく、日光そのものが若い肉体を焼く。生徒たちはたまりかねて、肌を焼かれるために裸になる。
午後一時、暑さと疲れで考える力を失って兵舎に帰る。第二班と入れ替って、それから昼食である。そして、顔色が黄色くなりそうな不安におびえながら、またしても冬瓜を食べる。

昼食を終えた生徒たちは、煙草を吸ったり、談笑したりするものもいるにはいるが、多くは上半身裸のまま、アンペラの上にじかに寝ている。ストップ、アンド、ステアなど、そんなぜいたくなことのできる状態ではない。行動も思考も、ストップ、アンド、ストップである。

遼吉も煙草を吸いおえると、からだを横にした。ほとんどその瞬間に、彼は眠りに落ちた。暑さもシラミもかまったものではなかった。

一時間ほどして目が覚めると、彼は霧に被われたような頭を振りながら上体を起した。アンペラは彼のからだの形を写して汗にぬれ、彼のからだはアンペラの編み目を写していた。

四

冬瓜と高粱飯の夕食が終ったとき、高畑が寄ってきて、遼吉を散歩に誘った。すでに日は西に傾き、暑さはいくぶんしのぎやすくなっていた。

二人は学生たちの群がる作業現場を遠目に見て、波打際の方へ出た。そこにはすでに、三三五五、汀に沿って歩く若い男たちの姿があった。

遼吉と高畑は、日差しの衰えた浜辺に腰を下ろした。浜の砂はまだ充分に熱を持っていたが、そのために下半身が汗ばむというほどではなかった。

高畑は周囲を見回してから煙草を取り出した。マッチをすり、手で囲って煙草に火をつけ、マッチの燃えかすを砂のなかに埋めてから言った。

「おい、どう思う」

「どうって」
「第一日目の勤労奉仕が終っての感想さ」
遼吉は後ろを振り向いて見た。煙草を吸っている高畑のために警戒したのだ。が、背後に人影はなく、目の前や左右に少し離れて、あるいは散策し、あるいは坐って話し込む、学生らしい姿があるばかりだった。
「別に感激はないね」と遼吉は、一息吐いてから言った。
「それにしては、おまえ真面目に働いてたじゃないか」
「そういうおまえもな」
高畑はまた後ろを振り返った。怪しい人影でも見たのか、彼は素早く煙草を砂に突き差し、その上に砂をかけて見えなくした。そして、折から吹いてきた海からの風のなかに、ふうっと煙を吐き出した。
「コンクリート船なんて、本当にできると思うか」と高畑は、煙草の代りとでもいうように砂をすくって、それを指の間から落しながら言った。
「さあ。鉄船が浮ぶんだから、コンクリート船も浮ぶんだろうよ」
「理論的には可能かも知れないけど、おまえ、コンクリート船が海に浮ぶところ想像できるか」
「そう言われれば想像はできないな。でも、関東軍の一年にわたる研究の成果だと言うんだから」
日が落ち、西の空が茜色から紫色に変っていった。
「さあ、その関東軍なんだがね」と高畑は、暮れなずむ遠い水平線の方に目をやりながら言った。
「その研究の成果は信用できるものかね」

「そんなこと、少なくとも専門家がやったことだろう？　おれたちは素人なんだから信用するしかないよ」

遼吉たちが坐っている周辺は砂場だったが、目を左右の遠くに転じると、黒っぽい色をした大小の岩が群居していた。波はそこでは砕けてしぶきを上げていたが、風が穏やかなのでしぶきも高くはなかった。

「じゃあ、おまえ、朝昼晩の冬瓜をどう思う」

高畑の話が急に変ったので、遼吉はその意図をはかりかねて、しばらく黙っていた。

「うまいと思うか」

「うまくない」

「そうだろう」と高畑はなぜか勝ちほこったように言った。「関東軍がだよ、コンクリート船を起死回生の自信作だと思うなら、そのドック建設に奉仕するおれたちに、冬瓜ばかり食わせるはずがないじゃないか。コンクリート船は冬瓜なみなんだよ。関東軍もおしまいだな」

五

暮れて行く空の下で、海辺の風景は黒っぽいものから順番に姿を消して行った。海は緩やかにはためく、薄墨色をした水平の広大な幕になった。思い出したように風が吹き寄せ、思い出したように波音が聞えた。

遼吉はズボンのポケットから煙草を取り出して火をつけた。火がついたのを確かめてから、深く一

つ吸い込み、大きく吐き出した。その一服が肺にしみて快かった。
遼吉は寮にいるとき、煙草を常習していなかった。日頃は忘れていて、特に吸いたいとは思わなかった。ただ、隠れて話をするとき、たとえば佐野や滝沢、あるいは高畑や大久保とのつきあいで吸った。それがここでは、働いたあとの休憩時、食事のあとに、煙草の一服が欲しくなった。何だかやみつきになりそうな気がした。
遼吉がうまそうに吸っているのにつられてか、遼吉の火を借りて、高畑が二本目を吸いはじめた。辺りは仄暗くなっているので、もう周囲を警戒する必要はなかった。
「そこでだ」と高畑はまた勢い込んで話しはじめた。「三度三度冬瓜食わしてコンクリート船造り。関東軍は真面目じゃないし、おれたちを馬鹿にしているよ。おれたちの若い肉体と頭脳はもっと値打ちのあるものじゃないのか。おれたちの青春の血と汗、もっとだいじに使ってもらいたいと思うね。肉体労働が嫌だというんじゃないけど、コンクリート船でなくて、何かあるだろうじゃないか。現代のかちかち山、狸の泥船みたいなもの造るの、おれ嫌だよ」
遼吉は高畑の言い分を聞きながら、しだいにそれに感染してゆく自分を感じていた。今高畑があらわに語る疑問と嫌悪は、もともと自分のなかにも潜在していたことに気づいた。
「そう言ったって、おれたちの方で作業を選ぶことはできない」
「だから、サボルのよ」
「そんなことしたら、ほかの学校と比べて、旅順高校だけがおくれをとることになるぞ」
「そんなこと気にしてるのか。それが軍の思うつぼ。競馬のように競争心をあおって働かせる。青年の誇りと純情をうまく利用するんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com